

*mantis* "one who divines, prophet, seer;" divine = foretell

本日の1語、「**mantis**」ですが、螳螂（かまきり）のことです。カマキリがじっとして前脚のカマを垂らしたように構えている、あのポーズは独特ですが、英単語の *mantis* は、実はその独特のポーズから来ているということです。



Mantis is from the Greek word **mantis**, meaning "**prophet, seer.**"

The Greeks, who made the connection between the upraised front legs of a mantis waiting for its prey and the hands of a prophet in prayer, used the name *mantis* to mean "the praying mantis."

(American Heritage Dictionary of English Language.)

ギリシア語で、カマキリを「マンティス」ということがわかりましたので **Liddell and Scott** を引いてみます。

古典ギリシア語（古代ギリシャ語）でいちばん権威がある辞書。改訂を加えたジョーンズの名前を加えて、LSJの略号が用いられ、リデル・スコット（Liddell & Scott）といわれている Liddell & Scott (rev. Jones & McKenzie): A Greek-English Lexicon, 9th edition with a revised supplement. Oxford のこと。いちばんあたらしいのは第9版で、そのあとでた「補遺（supplement）」と合本になっている。古典ギリシア語を読む人はほぼ必ず「リデル・スコット」の希英辞書を使う。分厚い辞書を丹念に一日に何時間も引くというのが、若い語学生に必須の作業である。その呼称にあるように、この辞書は元々ヘンリー・リデル（1811-1898）とロバート・スコット（1811-1887）という二人のイギリス人古典文献学者が19世紀半ばに作ったものだと、皆知っている。とくに、そのリデルにはアリスという娘がいて、それがルイス・キャロル（数学者チャールズ・ドジソン）著『不思議の国のアリス』のモデルだったという逸話も、広く知られている。

-----  
*μάντις*, ὁ, gen. *εως* Ion. *ιος*: (*μαίνομαι*): a diviner, soothsayer, seer, prophet: also as fem., a prophetess. 2. metaph. a foreboder. II. a kind of locust or grasshopper.

*mántis* 男性名詞（属格 - *εως* イオニア方言 - *ιος*）（動詞 *μαίνομαι* より派生）

I (1) 占う者、予言者、占い師、預言者。また、女性をあらわすために女性名詞としても使う。

(2) <比喩> 前兆となるもの。 II バッタもしくはイナゴの一種。

-----  
 古典語の辞典というのは、西洋で、その学習法の長い歴史があるために、記述がきわめて単純化されています。普通のヒトが見ても、まず、「暗号」にしか見えないことが多いです。

語義が複数ある場合、I, 1 などは略されて II, 2 から始まります。

**gen.** というのは「属格」（ぞっかく＝所有格）の意味で、*μαντέως manteōs* になりますよ、ということが書かれており、イオニアという地方の方言では語尾が *-ιος* になりますよ、ということです。

II の語義を見てわかるとおり、「カマキリ」とはどこにも書かれていません。「バッタもしくはイ

ナゴの一種」とされているだけです。なぜ、こういうアイマイな書き方をされているかと言えば、けっきょく、専門家も、古典ギリシア語の「マンティス」が、具体的に、ナンの虫を指していたのかわからないからです。ただ、「占い師」によく似たカッコウをする虫だったらしい、ということはわかります。しかし、古代ギリシアの「占い師」がどんなカッコウで占ったのか、わからなければ、その虫が、どんなカッコウをしたのかわかりません。

古典ギリシア語で、ハッキリと、この単語が「カマキリ」を指す、というものはありません。たとえ、その時代のギリシア人が、「カマキリ」を、あるコトバで呼んでいたとしても、それが文字になって残っていなければ、現代人がそれを知るのは不可能です。さらに、現代ギリシア語にあたってみても、スッキリと、この単語が「カマキリ」を指すというものがありません。「マンティスがカマキリを指す」と安直に認められない原因でもあります。

ヨーロッパに分布する主要なカマキリは、*Mantis religiosa* 「マンティス・レリギオーサ」“敬虔なるカマキリ”という種で、地中海沿いに分布します。ギリシア、イタリア半島、南仏、スペイン、ポルトガルという地域です。それにもかかわらず、ギリシア語は、「カマキリ」にズバリコレ、という単語を生み出しませんでした。同じようにラテン語にも「カマキリ」を指す単語がありませんでした。

ヨーロッパのほとんどの言語は、「カマキリ」を指すのに *mantis* の系統の単語を使います。この *mantis* は近世の昆虫学者が、ギリシア語彙の中に、「占い師のような虫」を指すコトバがあるのを知っていて、「カマキリ」を指すのにちょうどいい、と流用したのでしょう。

*mantis* 「カマキリ」。英語。1658年初出 *mante* 「カマキリ」。フランス語。1734年初出  
*Mantis* 「ウスバカマキリ属」。学術ラテン語。1758年、リンネが命名

ですから、ギリシア語の「マンティス」は、カマキリであるかもしれないし、カマキリでないかもしれないのです。

ヨーロッパでは、*Mantis religiosa* 「ウスバカマキリ」が主です。このカマキリは、日本でも、北海道南端から本土以南で見られます。むこうでは、このカマキリの前肢（ぜんし）のようすが、まるで“祈っている”ように見えることが有名らしいのですね。ですので、リンネは、種小名（しゅしょうめい）に“敬虔な”という形容詞を選んでいきます。英語では、ときおり、*mantid* という例が見られますが、これは、ラテン語の次のような曲用（きょくよう＝名詞の変化）に由来します。

<i>mantis</i>	[' マンティス ]	主格	
<i>mantidem</i>	[' マンティデム ]	対格	「カマキリを」
<i>mantidis</i>	[' マンティディス ]	属格	「カマキリの」
<i>mantidi</i>	[' マンティディー ]	与格	「カマキリに」
<i>mantide</i>	[' マンティデ ]	奪格	「カマキリから」

つまり、語幹が **mantid-** なんですね。だから、英語でも **mantid** という語形を使うヒトがいるわけですが、英語は、通常、「語幹にさかのぼらないのが慣例」なので、**mantis** を使うほうがいいのでしょう。

イタリア語では、「ロマンス語の主格は、ラテン語の対格にさかのぼる」という法則どおり、***mantide*** [ ' マンティデ ] 「カマキリ」。イタリア語 となっています。

実は、リンネに先行して、「祈るカマキリ」という命名をおこなった博物学者がフランスにいるのです。ジャック＝クリストフ・ヴァルモン・ドゥ・ボマール **Jacques-Christophe Valmont de Bomare** という人物で、フランス語の初出 1734 年の例というのも、まさしく、このヴァルモンによる、***mante religieuse*** [ マントルリジューズ ] “敬虔なるカマキリ” という呼び名です。リンネは、ヴァルモンの命名をラテン語で踏襲したのです。

ヨーロッパでは、なぜか、この学術的な呼び方が一般化してしまった嫌いがあり、わざわざ、

***mantide religiosa*** [ ' マンティデ レリ ' ジョーサ ] イタリア語

***mante religieuse*** フランス語 と呼ぶことがあります。英語で、しばしば、

***praying mantis*** [ プ , レイイング ' マンティス ] 「祈るカマキリ」。英語 と呼ぶのも、そのせいなのですね。

面白いことに、英語では次の 2 語が同音異義語です。

***pray*** [ プ ' レイ ] 祈る

***prey*** [ プ ' レイ ] 捕食する、餌食にする

そのため、カン違いして、***preying mantis*** 「捕食するカマキリ」と書くネイティブがひじょうに多いようです。ネイティブならではの間違いです。こういう誤りというのは、「なぜ、そういうコトバを使うのか、腑に落ちない」から間違うと言えます。

二名式（にめいしき）というのは、本来、学名だから必要とされることで、日常使うコトバとは関係ないものです。だから、**mantis** だけで十分なのです。